

# プロジェクト研究報告 (Sports for All)

## 2012 年度秋学期～2013 年度春・秋学期開講科目より

北濱 幹士\*・岡本 武志\*

(受付 2014年9月27日)

(受理 2014年11月9日)

### Project Research Report (Sports for All) Offered courses from 2012 fall semester to 2013 fall semester

by  
Kanji KITAHAMA\*, Takeshi OKAMOTO\*

#### Abstract

The report shows how this project study began, and also the learning system, which is called Holistic Learning System, of Tokai Fukuoka Junior College starting from 2012 April. The project study raises the students the basic attitude and skills which is from society request as much as possible. This paper introduces that one of the project study, "Sports for All," and discusses how important the project study is. In other words, learn-by-doing teaching is one of the great educational systems to meet "Shakaijin-kisoryoku" from Ministry of Economy, Trade and Industry, "Gakushiryoku" from Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, and especially, social demands.

**Keywords** : 短期大学生, プロジェクト, 実践教育

#### 1. はじめに

多くの短期大学が在学中の各種資格・検定取得を奨励していく傾向の中、東海大学教養部の歴史を持つ短期大学である東海大学福岡短期大学は(以後、福岡短大),『生きるを考え、働くを本気で学ぶ二年制の大学』として2012年4月より Holistic Learning System (統合的学習システム)を採用した。これは、2012年度からのカリキュラム改訂に伴ったものであり、その目的とは、情報技術と国際性を身に付け、社会に対する強い使命感と豊かな人間性を備えた若い人材を育成する事である<sup>(1)</sup>。それらを具現化する統合的学習システムとは、4つのちから育成科目群・基礎教育科目群と専門基礎科目群・専門科目群を統合化し<sup>(2)(3)(4)</sup>、総合的な知能の育成をめざした学修手法であり、社会が求める基本姿勢・能力を磨くプログラムである(Holistic Learning Systemの詳細は、下記の科目概要に含める)。勿論、このシステムが学習の全てではなく、留学制度・補助講座、そして各種資格・検定取得、短大卒業後の進学・編入、或いは就職指導も並行して行われた<sup>(5)</sup>。

本報告では、福岡短大でプロジェクト研究が始まった経緯及び学科内でプロジェクト研究が取り扱われた経緯・結果報告をした上で、「Sports for All」のプロジェクト

トが取り組んだ実施内容について記した上で、プロジェクトについて考察する。

#### 2. 科目概要

プロジェクトについて東海大学創立者の松前重義は、無装荷ケーブルの着想についての手稿の中で次のように述べている<sup>(6)</sup>。

プロジェクト研究としての特長

若き青年技術者の同志的結合 職場を超えて

研究目的に対する情熱 — チームワーク

国際技術確立の目標

このように、松前は当時としては、活気的なアイデアであった「無装荷ケーブルによる長距離通信方式」を着想していた頃よりプロジェクト研究の重要性を見抜き、また、身を持って実践していたのではないかと示唆される。

上記した松前氏の息子であり、現在の東海大学総長である松前達郎は自身の著「雑記帖」の中で<sup>(7)</sup>、実用の学の必要性を説いている。大学では、実際に役に立つ知識と技術とその獲得方法を教える教育システムを採り入れるべきだと提唱している。また、その実用の学とは「体験と技術」の学であり、実験実習や野外実習などの体験実習を通してモノや人や社会事象と実際に触れ合うこと

から、知的生産の技術を獲得して行く事を推奨している。

この松前重義と松前達郎の理念を具現化したものが東海大学のチャレンジセンターではないのだろうか<sup>(8)</sup>。チャレンジセンターは、学生が発想したプロジェクト活動を通じて「自ら考える力、集い力、挑み力、成し遂げ力」を体得する場として設置されている。尚、センターには、チャンレンジプロジェクト、特別プロジェクト、ユニークプロジェクトと内容、或いは目的等によって様々なプロジェクトの形態が取られている（詳細はチャンレンジセンターHP参照）。

福岡短大において、各ゼミナール活動の一環として学内外で様々な活動を実施していた経緯はあった。しかし、前述したように、基礎教育科目と専門科目を有機的に統合し、プロジェクトを運営して行く事によって、より実社会で通用する総合的な力・知恵を養成していく科目として正式に位置づけて実施したのは初である。また、プロジェクトでは、より良く運営して行く為の必要なプロセスとして、PDCA サイクルを実践的に取り扱う事とした。様々なプロジェクトを計画、実行、点検、そして改善することによって獲得する経験知（Holistic Wisdom from experiences）を生きた知恵として学ぶ事が、『生きるを考え、働くを本気で学ぶ二年制の大学』の最終目標である<sup>(9)</sup>。

本カリキュラムが導入された 2012 年度よりゼミナール制は廃止となり、ゼミナールで行っていた生活・進路指導等もプロジェクト研究担当教員が行う事になった。つまり、ゼミナールと称していた科目が新規科目となり（プロジェクト研究）、実践的教育の取り組みを全面に出す仕組みへと移行したのである。尚、福岡短大の学年歴はセメスター制であり、入学後の第 1 セメスターは初年次教育として、新入生全員に対してフレッシュマンゼミナールが必修科目として開講され、第 2 セメスターよりプロジェクト研究 I が開講し、第 3・第 4 セメスターでは、プロジェクト研究 II、III と継続して行われた（プロジェクト研究 I、II、III も必修科目である）。

2012 年度のプロジェクト研究 I～III では、国際文化学科の 3 コース（レジャー&ツーリズム、スポーツマネジメント、英語・韓国語・中国語）に基づいて、6 つのプロジェクトを担当教員が作成した<sup>(10)</sup>（表 1 参照）。その後、第 1 セメスター開講のプロジェクト基礎にて<sup>(11)</sup>、担当教員より各プロジェクトの概要説明のプレゼンテーションが実施され（7 月 13 日、20 日）、その後、学生は希望のプロジェクトを選択した（7 月 27 日）。尚、全てのプロジェクトにおいて履修人数制限を設けなかった為、学生は自身が希望するプロジェクトに所属と相成った。

表 1 2012 年度プロジェクト研究一覧

コース名・プロジェクトタイトル	担当教員
<b>レジャー&amp;ツーリズムコース</b> ・旅行商品企画プロジェクト —海外ヒット商品の作り方— ・北部九州における国際文化交流マップ作成プロジェクト	藤本 真下
<b>スポーツマネジメントコース</b> ・Sports for All（みんなのスポーツ）	北濱・岡本
<b>英語・韓国語・中国語コース</b> ・ボランティア英語人材養成プロジェクト ・九州地域における観光資源説明の韓国語化プロジェクト ・九州地域における訪日中国人市場の嗜好調査プロジェクト	ウエア・神山林 チョウ

\* 学科会議資料より筆者作成

2012 年度プロジェクト研究の成果を発表する場として、プロジェクト研究発表会が 2014 年 1 月 28 日に学内で実施された。本研究発表会は、プロジェクト研究を行った学生だけではなく、2013 年度プロジェクト研究 I を履修している学生も一同に介して行われた。尚、情報処理学科と国際文化学科の両学科合同発表会であり、各プロジェクトが 15 分程度のプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った<sup>(12)</sup>。情報処理学科からは、以下の 3 つのプロジェクトの発表が行われた、1) 進路対策 Web 教材制作 - 就職編 -、2) e ラーニング教材の開発と新たな開発手法の提案について、3) 幼稚園写真プロジェクト 幼稚園保護者向けコンテンツ作成。国際文化学科は、教員人事などにより当初の予定から若干の変更があったが、3 コースより 5 つのプロジェクト発表が行われた（表 2 参照）。

表 2 2012 年度プロジェクト研究発表会

プロジェクト研究発表テーマ	担当教員
<b>レジャー&amp;ツーリズムコース</b> ・ハワイへの日本人観光客を増やすには？	藤本・柏木
<b>スポーツマネジメントコース</b> ・Sports for All（みんなのスポーツ）	北濱・岡本
<b>英語・韓国語・中国語コース</b> ・ボランティア英語人材育成プロジェクト（日本文化について） ・天草メモリアルホール説明資料の韓国語化 ・アニメにおける日中両言語の比較	ウエア・松本 林 チョウ

\* 発表順序は異なる

### 3. Sports for All プロジェクトの概要

#### 〈3-1〉 プロジェクト研究Ⅰ

Sports for All プロジェクトを選択した学生と共に、以下の取り組みを行った。プロジェクト研究Ⅰでは、スポーツマネジメントコースの科目を履修しながら、様々な学内外のイベントに参加をし、スポーツマネジメントの現場を視察・体験して、多種多様な経験を得る事を目的とした。参加した主なイベントは下記の通りである 1) 第5回夢灯籠まつり (出展), 2) 第10回北九州チャンピオンズ国際車椅子バスケットボール大会<sup>(13)</sup> (大会視察), 3) FFG5周年記念キッズマラソン大会 (大会運営補助), 4) 第4回宗像インディアカ大会 (大会運営補助及び出場)。そして、学期末後の2月上旬に前年度カリキュラムの卒研ゼミナールⅡ (北濱・岡本) 所属の2年生との合同合宿を不知火研修センター松前会館で行った<sup>(14)</sup>。尚、合同合宿では、プロジェクト研究Ⅰで体験した事柄をグループでまとめてプレゼンテーションを行った。

本合宿は、東海大学の施設を利用して、大学のスケールメリットを体感する事も視野に入れていた事もあり、往路では、東海大学熊本キャンパスの訪問を加えた。キャンパス内の東海大学付属熊本星翔高等学校では、図書館等学内の見学をし、その後、東海大学熊本校舎では、総合経営学部の教員及び学生から、熊本でのスポーツに関する様々な取り組みの紹介を受け、最後に松前記念サッカー場 (FIFA・JFA 公認)<sup>(15)</sup>の視察を行った。尚、2012年度合同合宿の日程及び概要は表3を参照して頂きたい。

#### 〈3-2〉 プロジェクト研究Ⅱ

プロジェクト研究Ⅱでは、第2セメスターでの様々な学習及び体験を基に、福岡東海キャンパス内において3つのミニプロジェクト企画及び運営を実施した<sup>(16)</sup>。企画運営したミニプロジェクトは以下の3つである、1) 松前記念体育館にて開催されている第28回玄海旗中学生柔道大会<sup>(16)</sup>にて「TOKAI 体力測定会」ブースの出展及び福岡東海キャンパス紹介パネルの展示、2) 東海大学付属自由ヶ丘幼稚園翼の会 (園児保護者会) 主催の夏祭りにて、子ども達が楽しく遊べるブースとして「つみつみカンカン」の出店、3) キャンパス応援と称し、応援用団扇・横断幕の作成。学生は3つのミニプロジェクトに分散し、リーダー、サブリーダーを選出し、企画の準備、運営に当たった。尚、活動準備・当日は互いのミニプロジェクトメンバーが協力して運営補助に当たった。

表3 2012年度合同合宿日程・概要

1日目	2日目	3日目
	起床・朝の運動	起床・朝の運動
	朝食	朝食
出発・移動	研修2	研修6
東海大学熊本 キャンパス見学	昼食	出発・移動 (昼食)
	研修準備	
移動	研修3	到着・解散
夕食	夕食	
研修1	研修4	
1年生企画	研修5	
消灯・就寝	消灯・就寝	
研 修 1: 演習「体力の測定方法を再考する」 1年生企画: 1年生主催による懇親会 研 修 2: 発表「活動報告 (1年生)、研究発表 (2年生)」 研 修 3: 演習「スポーツの強度を測る」 研 修 4: 演習「身体のバランスを測る」 研 修 5: ディスカッション: 「将来必要な事とは」 研 修 6: 発表「測定評価について (各グループ)、 将来の夢 (各自)、合宿まとめ」		

#### 〈3-3〉 プロジェクト研究Ⅲ

プロジェクト研究Ⅰ、Ⅱを踏まえ、プロジェクト研究Ⅲでは、以下の3点を行った 1) 個人課題: 調査研究 (表4参照)、第24回建学祭にてプロジェクト研究Ⅰ・Ⅱの成果報告のパネル展示、2) Sports for allの集大成: 企画運営を全て自分たちで行うイベントの開催及び、プロジェクト発表会に向けての準備。プロジェクト研究Ⅰと同様に、2月上旬にプロジェクト研究Ⅰ所属の1年次と合同で合宿をグローバルアリーナ<sup>(18)</sup> (以後: GA)で行った。尚、本合宿では、各々が調査研究の発表を行った (表4参照)。2013年度合同合宿の日程及び概要は表5を参照して頂きたい。

表4 2013年度プロジェクト研究Ⅲ 調査研究

調査研究タイトル
2017年 WBC 侍ジャパンの監督は俺だ!
全国高等学校野球選手権大会 (甲子園) で優勝しよう!
第一回剣道知識検定~100人に聞いてみた~
Jリーグは1ステージ制と2ステージ制どちらが良いのか
サガン鳥栖がJ1で優勝するためには
全国高等学校バレーボール大会で優勝する秘訣教えます!
イケメン揃いのセ・リーグ球団は!
バドミントン日本女子ランクを制するのはこの高校だ! ~ 2012年度バドミントン日本ランキングトップ50の女子選手出身高校から探る~

表5 2013年度合同合宿日程・概要

1日目	2日目	3日目
	起床・朝の運動	起床・朝の運動
	朝食	朝食
出発・研修1	研修4	研修7
昼食	昼食	昼食
研修2	研修準備	出発・移動
研修準備	研修5	解散
夕食	研修6	
研修3	夕食	
1年生企画		
消灯・就寝	消灯・就寝	
研 修 1: 演習「活動量計を付けて、赤間探索」 (徒歩にてGAへ移動) 研 修 2: 演習「人前に立って運動指導してみよう」 研 修 3: ディスカッション:「強化クラブは、寮?通い?」 1年生企画: 1年生主催による懇親会 研 修 4: 演習「GA体験プログラム、 講話(GA統括マネジャー)」 研 修 5: 演習「つもりと実際」 研 修 6: 発表「活動報告(1年生)、研究発表(2年生)」 研 修 7: 発表「GA体験プログラムについて(各グループ)、 近い将来の夢(各自)、合宿まとめ」		

#### 4. 考察

2012年度のプロジェクト研究が終了し、実社会で通用する力・知恵を学生が持つことができたのかは不明である。しかし、少なくともその素地を養うことはできたと自負している。在学中に身に付けた力・知恵は、彼ら自身の今後の糧と成りうるものであり、卒業後直ちにに見えるもの、或いは形として現れるものではないと考えている。1年・5年・10年後と、いつの日か彼らの力・知恵が社会で活用されて行けば良いのであり、その準備・方法を教えるのが大学の使命と思われる。チャレンジ精神旺盛な若者による斬新で面白い発想を、同じ夢を持った仲間と協力して創り出し・行動する、これが「より実践的に社会が求める基本姿勢・能力を磨く活動」、所謂、プロジェクトが追究するものではないだろうか。

松前が晩年に骨子をまとめた手稿の中で(科目概要の欄参照)<sup>(19)</sup>、「プロジェクト研究」が述べられている事は先述した。無装荷ケーブル通信方式の研究業績が認められて工学博士の学位を得たのは1937年であり、松前は、1937年以前に、プロジェクト研究と言う考えが心には存在していたと推察される。また、「プロジェクト研究としての特長」と記している事に着目したい。松前は、「特徴」ではなく、特に優れた際に使用される「特長」を使用しており、プロジェクトの基に集った若者が、「結

合し、情熱を持って目標を遂行する」事こそが、プロジェクトの優位点である事を見抜いていたのではないかと考えられる。

Sports for All プロジェクトの学生が自主的に情熱を持って目標を遂行する姿が見られたのが、プロジェクト研究Iで大会運営補助を主として取り組んだインディアカというニュースポーツである。全員が未経験であったインディアカに挑戦し、2ヶ月程の練習で大会に臨んだ。当大会の参加チームは、宗像市近隣で活動しているチームが多くを占め、参加者の平均年齢は40代から60代である。従って、大会の目的は、地域密着・シニア層&初心者を中心とした「近隣チームと交流できるインディアカ大会」である<sup>(20)</sup>。少なからず、他の参加チームより体力に自信を持っていた学生チームであったが、1勝どころか1セットを取る事もできずに敗退した<sup>(21)</sup>。この結果に奮起し、2年次には地域大会に自主参加し<sup>(22)(23)</sup>、2013年度の宗像インディアカ大会では1勝する事ができ、9チーム中7位の結果を得た。インディアカに取り組んだ当初は、強い興味を持っていたと言える状態では無かった学生が、大会運営補助・参加を通じて、また、他参加者より試合のコツを教えてもらうなどの交流が芽生えた。また、他大会に参加した際には、懇意のチームから応援してもらうなど、彼ら自身が過去に行ってきたスポーツ環境とは異なった体験をする事ができた。

「実学のすすめ」の中で松前は、学校について梅棹忠夫氏の言葉を引用している、「学校では知識は教えるけれど、知識の獲得のしかたはあまり教えてくれない」<sup>(24)</sup>。松前がこの本を記した昭和59年と現在とで、学校は変化したのだろうか。参加体験型などの企画は数多くなったように見受けられるが、全てが用意周到に準備されている参加体験型が多いのではないだろうか。知識の獲得の方法は、「資料をさがす。本をよむ。整理をする。ファイルをつくる。考える。発想を定着させる。それを発展させる。記録をつける。報告をかく」<sup>(25)</sup>ではないだろうか。現代社会においては、ICT機器が発達し、いつでもどこからでもインターネットに接続して検索する事ができる。多くの本を持ち歩かずとも電子書籍があり、多くの資料は、紙媒体ではなくデータファイルとして整理保存ができ、それらのデータは容易にコピーができ、或いは他者に送信する事ができる。また、それらICT機器を使用して、写真・ビデオ撮影等の記録ができ、その場からデータを転送するなど、ネット環境さえ整えば現場から地球の裏側への報告もさほど難しい事では無い時代になった。このような時代になったからこそ、梅棹が指摘する、「考えて・発想して・発展させる」ことを更に重要視しなければならないと思われる。

Sports for All プロジェクトでは、卒業前の第3セメスターに調査研究(卒業論文)をプロジェクトの一部として各自に課した。福岡短大では、卒業論文の提出は卒業要件に含まれていない。従って、卒業要件に必要な単位

を修得する事が短大で学位（短期大学士）を修得する全てである。しかし、各々が興味を持つことに関して調査研究を行う事は、短期大学生活における一つの礎、或いは区切りとして必要であると担当教員間で意見が一致した。三木は<sup>(26)</sup>、自身のホームページで卒業論文の意義について、卒論とは、大学生の「特権」、大きな「喜び」、将来における重要な「財産」であると述べている。卒業論文を作成する事が大学の学びであるとは思わないが、プロジェクトのようにPDCAサイクルに則って行い、報告書の作成、或いは引き継ぎの指示書作成等が三木の述べる卒業論文に値すると考えても良いと思われる。尚、調査研究は、自己のスポーツ経験に基づいた内容となり、経験による興味の持ち方が特定の種目に偏る事が垣間見ることができた。

池田は<sup>(27)</sup>、教育の役割に関して「若い人が志を立てるのを働きかけてサポートすることだ」と述べている。つまり、教育は「志を立てさせる」事ではなく、「志を立てるのを働きかける」事である。教え育むのが教育であれば、しっかりと志を自分自身で立てられるような状況へ導き、「志」を、そして「夢」、「目標」が持てるように働きかける必要がある。教育の場において、真剣に自分と向き合う（挑戦する）場が減り、受け身に、そして無難に卒業（生活）する事だけを優先してはいないだろうか。或いは、教員の思惑だけで学生の志を作っていないだろうか。学生は、自身の将来の目標の作り方を学校に求めているだろうか。

高等教育の場合、学部・学科の枠を超える事が難しいと捉えがちであるが、目的と情熱を持った若き学生の同志的結合（チームワーク）による、新たな発見（挑戦）には学部・学科は無関係である。経済産業省は、2006年から社会人基礎力と称して、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を提唱している<sup>(28)</sup>。文部科学省は、「学士力」の主な内容として、1) 知識・理解、2) 汎用的技能、3) 態度・志向性、4) 統合的な学習経験と創造的思考力、の4項目が示されている<sup>(29)</sup>。両省が求めている社会で必要な力とは、専門的な知識よりも更に他の事柄ではないだろうか。つまり、資格取得、進路対策と自己保身を優先するのではなく、仲間と一緒に創造できる（する）事（場所）が必要であり、その中で自己管理、社会的責任、コミュニケーションスキル、問題解決能力等を総合的に養う事が望まれているのである。

## 5. まとめ

2012年度プロジェクト研究報告を作成する上で、改めてプロジェクト研究の意義を考える事ができた。また、東海大学創設者が考える「プロジェクト」の重要性について感銘を受け、今後プロジェクト型の教育システムを更に推進すべきであると感じた。

プロジェクトは、実際に役に立つ知識と技術とその獲

得方法を教える教育システムの1つであり、各種プロジェクトの基に集った若者が、結合し、情熱を持って目標を遂行する事ができ、その中で業務プロセスの管理手法としてPDCAサイクルを実践的に学ぶことができる。社会が求める基本姿勢・能力を磨く最適なプログラムとして更に推進されるべきである。

## 引用文献

- (1) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：pp, 3
- (2) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：pp, 7  
基礎教育科目群：1) 東海大学の教育の柱：現代文明論、2) 国際文化学科・情報処理科の5コースの基礎：総合教育科目、3) プロジェクトについて基本的な理解：初年次教育
- (3) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：pp, 7  
4つのちから育成科目群：3カ国後初級、情報リテラシー、マネジメント基礎、コミュニケーション基礎
- (4) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：国際文化学科の3コース：スポーツマネジメント、レジャー&ツーリズム、英語・韓国語・中国語 pp, 9、情報処理科の2コース：メディアデザイン、オフィスマネジメント pp, 13
- (5) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：前掲
- (6) 松前重義誕百年記念事業企画委員会 手稿影印集編集委員会：「松前重義手稿影印集」東海大学出版会、2001年10月24日発行 pp.71  
無装荷ケーブルの着想について：本手稿は、松前が無装荷ケーブル通信方式を研究したときの構想について晩年に備忘録として、その骨子をまとめたものである。[推定 1975～1980年]
- (7) 松前達郎：「雑記帖 自然・文明・教育・外交をめぐって」、松前達郎の会、昭和59年発行、pp, 64
- (8) 東海大学チャレンジセンター：  
<http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/index.html>
- (9) Guide Book 2012 東海大学福岡短期大学：前掲
- (10) 2012年度第2回国際文化学科会議に提出されたプロジェクトタイトル及び担当教員案より作成
- (11) 東海大学福岡短期大学 今月のトピック授業紹介：2012年掲載6月版：プロジェクト基礎  
<http://www.ftokai-u.ac.jp/topics/201206.html>
- (12) 東海大学福岡短期大学 今月のトピック授業紹介：2013年掲載3月版：2013年度のプロジェクト研究発表会が行われました  
<http://www.ftokai-u.ac.jp/topics/2013.html>
- (13) 国際車椅子バスケットボール大会 HP：  
<http://www.kitakyushu-cup.com/>
- (14) 不知火研修センター松前会館：（2013年度末閉鎖）  
[http://www.u-tokai.ac.jp/alumni/application\\_form/shared/pdf/shiranui.pdf](http://www.u-tokai.ac.jp/alumni/application_form/shared/pdf/shiranui.pdf)
- (15) 松前記念サッカー場：  
<http://www.75th.tokai.ac.jp/summary/detail01.html>
- (16) 福岡東海キャンパス：<http://campus.ftokai-u.ac.jp/>
- (17) 第28回玄海旗中学生柔道大会  
<http://www.kbc.co.jp/sports/judo-jhigh2013/>
- (18) グローバルアリーナ：<http://g-arena.com/>
- (19) 松前重義誕百年記念事業企画委員会 前掲書
- (20) 宗像インディアカを楽しむ会：第4回宗像インディアカ大会 大会要項より抜粋
- (21) 第4回宗像インディアカ大会は男女混合チームでの参加の為、性・年齢別によるハンディキャップ制を用いた特別ルールを採用している
- (22) インディアカ大会@岡垣サンリーアイ 2013年11月10日開催
- (23) 学生チームは1セット取る事ができたものの、未勝利
- (24) 松前達郎：「雑記帖 自然・文明・教育・外交をめぐって」、松前達郎の会、前掲書
- (25) 松前達郎：「雑記帖 自然・文明・教育・外交をめぐって」、松前達郎の会、前掲書、pp, 63
- (26) 慶應義塾大学法学部法律学科三木浩一研究会 HP  
<http://miki-seminar2013-keio.jimdo.com/%E5%8D%92%E6%A5%AD%E8%AB%96%E6%96%87/>

- (27) 池田弘：「かなえる力」，東京書籍，平成 26 年発行 pp, 59
- (28) 経済産業省 HP：社会人基礎力  
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- (29) 文部科学省：「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm)